

岩 溪 と 谷

1991年
春号 4月～6月
創刊号

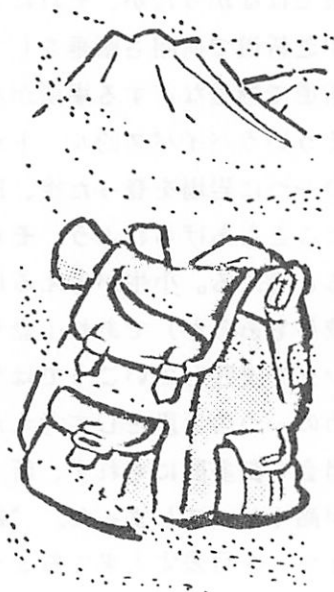
最近感じたこと

最近アルパインクライマーが少なくなったとよく聞くが小生も実感そう感じる。シーズン中も一の倉、滝谷に以前の賑わいはない。落石が少ないなどの良い面もあるが、何か一抹の寂しさを感じるのは小生だけだろうか。ルートの荒廃も進んでいるようだ。一部の人気ルートにはばかり人が集中し、他のルートには人影を見ないのである。そういうルートを登ろうとすると、浮石やボロボロのハーケンに難渋し、時間もかかることになってしまう。それは下降ルートについても同様である。中芝新道は以前から良い道ではなかったが、それにも増してわかりにくくなっている。当会のパーティも中芝新道で何回も懸垂をして降りてきたり、ビバークしたパーティもいる。中芝新道で懸垂などする場所があるはずがない。所詮ルートを間違えたのだ。聞くとそういうバイパス的ルートができてしまっているらしい。中芝新道が荒れた理由の一つに岩場を登った後、頂上に立たず懸垂で降りてしまうパーティが多くなったこともあげられよう。それはフリークライミングの延長で登っているからであると考え。小生が考えるにはフリークライミングは岩登り（最近ビルの側壁登りもあるが）であり山登りではない。我々は常に山登りの為のフリークライミングを実践していこうではないか。つまり岩を登るのも沢を登るのも山を登るための一つの手段として考えたいのである。こんな事をいつまでも言っているから当会も御多聞にもれず、新人が少ない。現役が減ってしまった。会員の平均年齢が高くなってしまった。“新人さん入会してちょうだい” “アルパインクライマーを目差す人来てちょうだい” “沢登りをしたい人来てちょうだい” “このままではクラブがつぶれちゃうよー”

当会から久しぶりに季報が出た。以前はACCニュース、会報『ナーゲル』を出していたが、茨城として独立してから初めてである。一部の会員から何でこんな面倒なことを、という意見も出た。しかし、クラブとして活動している以上、報告書は出すべきである。回りを見てほしい。きちんと月報や会報を出しているクラブは組織のしっかりした会である。我々もそういったクラブを目標とし少しでも近づくよう頑張っていこうではないか。仕事に山行に忙しい中、原稿を書いてくれた会員に感謝する。

こんなつまらない報告書でも発行するまでには、多くの労力と時間を費やしている影の者がいるということを会員諸君は忘れてはならない。

(変酋長)



集会報告 （於、スカイラーク土浦真鍋店）

4月10日

参加者 本図、木村、菊地、原田、佐藤、栗原、高田

4月17日

参加者 本図、高木、原田、鈴木、菊地、川上、佐藤、笹沢、村上、高田

4月24日

参加者 本図、鯉河、中島、菊地、生井、栗原、佐藤、川上、村上、高田

5月 8日

参加者 本図、佐藤、高木、栗原、笹沢、高田

5月22日

参加者 本図、鯉河、菊地、高木、川上、佐藤、笹沢、高田、村上

6月 5日

参加者 本図、菊地、高木、佐藤、川上、笹沢、中島、鯉河、高田

6月19日

参加者 原田、菊地、栗原、鈴木、笹沢、佐藤、川上

山行報告

- 4月14日 上州子持山屏風岩（岩トレ） L. 生井、原田
- 4月20日 ハヶ岳横西壁無名峰南陵 L. 高田、原田
- 4月28日～5月6日（春山合宿）
- 4月28日 北アルプス杓子岳東壁A尾根 L. 本図、高田
- 4月29日 “ “ “ “ 下山 “ “
- 4月30日 北アルプス穂高岳周辺
- 上高地→横尾 L. 高田、原田
- 5月 1日 屏風岩中央カンテ（敗） “ “
- 上高地→横尾 佐藤、川上
- 上高地→湊沢 L. 鈴木、笹沢
- 5月 2日 横尾→上高地 原田
- 屏風岩中央カンテ（敗） L. 高田、川上、佐藤
- 湊沢→上高地 L. 鈴木、笹沢
- 5月 3日 横尾→湊沢 L. 高田、川上、佐藤
- 5月 4日 湊沢→奥穂高岳→湊沢 L. 高田、川上、佐藤
- 上高地→槍沢 L. 本図、栗原、村上
- 5月 5日 槍沢→槍ヶ岳→横尾 L. 本図、栗原、村上
- 湊沢→北穂高東稜→横尾 L. 高田、川上、佐藤
- 5月 6日 横尾→上高地 本図、栗原、村上、高田、川上、佐藤
- 5月12日 上州子持山、大黒岩&屏風岩（岩トレ） L. 本図、原田
- 5月19日 西丹沢 小割沢→湯沢 L. 高田、高木、佐藤
- “ 弥七沢→湯沢 L. 本図、原田
- 5月26日 日立御岩山（岳連岩登り講習会） 本図、村上
- 5月26日 谷川岳一の倉沢中央カンテ L. 高田、佐藤
- 5月28日 表妙義縦走 L. 鈴木、笹沢
- 6月 2日 谷川岳 東尾根 L. 本図、高木、笹沢、村上
- 6月 9日 日立御岩山（岳連救助訓練） 鯉河、佐藤、高田
- 6月16日 谷川岳一の倉沢コップ左岩壁（敗） L. 本図、原田
- 6月29日 谷川岳一の倉沢コップ正面壁（敗） L. 高田、原田
- 6月29日～6月30日 奥只見（深瀬山菜教室） L. 本図、菊池

子持山（屏風岩ゲレンデ）

91. 4. 14

パーティ L. 生井一男、原田真由美

群馬県子持山にある屏風岩にて人工のトレーニングに出掛ける。

下館（23時）集合→一路屏風岩に向け、出発する。

屏風岩までのアプローチは、国道17号線の子持村に入って北上すると、右に赤城ICへ、行く信号がある。その20m先の信号を左折し、農免農道に入って、子持神社方面に上り鳥居の所を右折し少し行くと登山口の看板がある。車は、その少し上に停められるスペースがある。 屏風岩到着……2時

ここのゲレンデはアプローチが短く車から1分ないし3分で取り付きに着くので非常に楽である。

今回は、行者ハングの左側の人工のルートに取り付く事にする。

まずは、原田さんが、トップでトライする。スタート時間（10時）原田さんも大分、人工は慣れたもので、難無く登って行く。

ピンの間隔は、比較的短く快適なクライミングができる。でも人工からフリーに移行する所では、少し戸惑った様だった。

ビレー地点まで約2時間係っている。

2ピッチ目は、左カンテのルートと合流する様な感じで、フリーでも行ける。そして屏風岩の頂上に達する。（約2ピッチ半）

下降は、頂上から登山道を経て行者ハングの下まで降りられる。

これで帰るのでは、勿体無いので行者ハングをハングの乗っ越しの所までトライする。

ハングの張り出しは、6m前後だろう。

ここは、私が、トップを引き受ける。

取り付き3時→このルートは、2ヵ所ピンの間隔が遠い所あった。特に、乗っ越しの手前の所が遠く感じた。それと途中で、アブミを、紛失し、回収した時間があった為に約30分も係った。

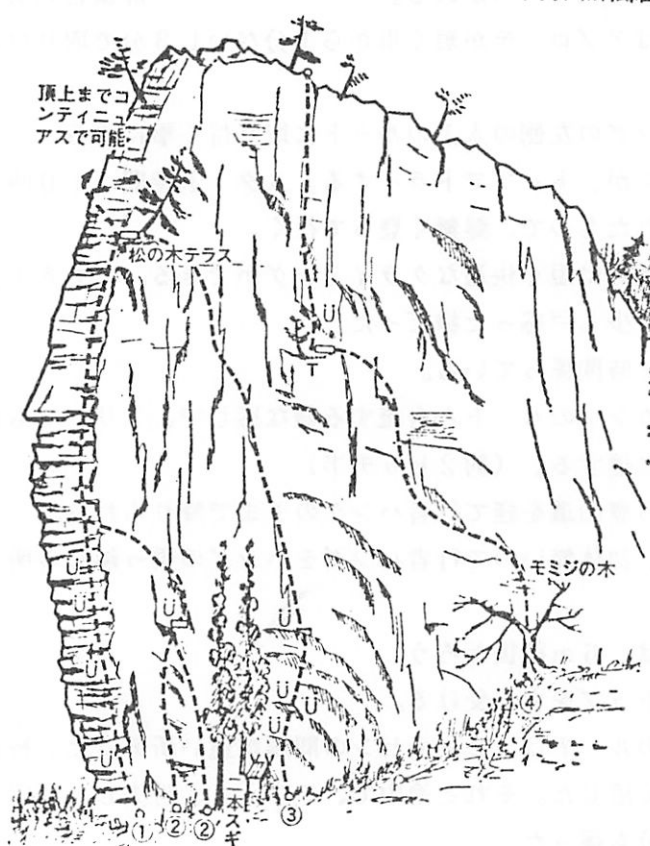
セカンドは、トップザイルにてビレーする。

原田さんアタック開始……→ 3時35分 ……ビレー地点到着……→ 4時7分

予想では、4時20分過ぎ当たりかなと、思ったのが、ナカナカの健闘で、32分の出来であった。

天気も、1日どうにか、もってくれて有意義な1日であった。（生井 記）

子持山屏風岩



◀子持山屏風岩

登った時には雪はなし

八ヶ岳無名峰南稜

91. 4. 21

パーティ L. 高田暢年、原田真由美

4/20 土浦20時発、八ヶ岳美濃戸口へ向かう。目差すは、無名峰南稜。今年になって2月、3月と無名峰南稜を狙ったが、ラッセルなどで取付きまで時がかかりすぎ時間切れで敗退、更に車が4WDでない為美濃戸口から歩かなければいけない始末。しかし4月にもなれば雪もしまるだろうし今回は車も4WDであるため美濃戸山荘まで入れる。「よーし今度こそは」と美濃戸口に着き、ここより4WDに入れ美濃戸山荘への林道に入る。「あれ雪がない」先月あんなにあった雪が全くないではないか。とりあえず山荘駐車場に11時30分に着き、ビールを飲み仮眠。

4/21、5時出発。赤岳鉱泉までの登山道を歩く。先月に比べると寒さも、雪の量も全然違う。鉱泉6時着、この辺りにきてやっと雪が出てきた。横岳西壁を見上げると、先月真白だった西壁が、ほとんど雪がないではないか、余り雪が多くてラッセルを強いられるのも困るが、ここまで雪がないのも困る。

とりあえず取付へと向かう、ルンゼに入るとさすがに雪量もけっこうあるがよくしまっており歩きやすい。取付9時、ここで登攀具を付ける。下部岩壁は1ピッチザイルをのぼしあとは、上部岩壁まで、木登りか、落石に気をつけながらのガレ場登りである。雪があれば快適な雪稜登りなのであろう。冬以外にここを訪れる人がいないのがわかる気がした。上部岩壁、目の前にややかぶり気味の壁が出てきた。ここで原田さんにトップを交替し原田さんがチョックストーンにつかまり強引に登っていく、このルートで唯一登攀らしい所であった。ここを過ぎればすぐそこに稜線が見えた。稜線着12時20分、4月とは言え、稜線上はさすがに風が冷たい。ここで行動食を食べ地蔵尾根を下る。ゴールデンウィークに備えてかクサリが新しい。行者小屋14時30分、前回来たときは、テントがいっぱいあり登山者もたくさんいたのに、テントは1張位で登山者もまばらであった。おそらくゴールデンウィーク前であるため、今週は外出を控えているのであろう。この分だと中央高速も渋滞してなく、スムーズに帰れるだろう、などと二人で話しながら、美濃戸山荘16時30分着、17時発、しかし中央高速はいつもどおりの渋滞で、土浦23時着。

雪が少なかったのが多少残念であったが、とりあえず登った事には違いない訳

であり、3度目の正直で今シーズン中に無名峰南稜を登れたことは大変満足である。パートナーと天気感謝、感謝。

(高田 記)



八ヶ岳無名峰南稜

上部岩壁チムニー登攀中



大同心をバックに

杓子岳東壁 A 尾根

91. 4. 28~29

パーティ L. 本図一統、高田暢年

4月28日、早朝3時頃であつたろうか、まだ暗いうちに二俣に着く。猿倉まで車で入れると思っていたのに鎖で車止めがしてあるので右の空地で車を止め仮眠を取る。明るくなると何台かの車が鎖をはずし入っていったので我々もそれに続く。猿倉に着くとそこにはすでに十数台の車が入っていた。

天気予報では明日は天気が悪くなるというので、今日中に東壁も登ってしまおうということになる。ここから樺平までは双子尾根を登るのだが、天気良くだいぶ暑くなってきた。苦しい登りだが小日向のコルで一休みしただけで樺平まで飛ばす。樺平に食糧、その他の荷物をデポし取付きに向う。奥双子のコルより東壁下をトラバースするが雪崩そうでいやな所だ。白馬鍾北稜を登っているパーティが見える。上部は快適そうだが下部はブッシュの目立つ長いルートだ。さて我々とはという地形は確認してきたつもりだが壁の中に入ってしまうと現在地に自信がなくなる。A尾根右稜末端の壁と思われる下を回り込んで左稜に向うが、目差す小さな岩塔など見あたらないではないか。このまま雪壁を登っていく。すぐ左側を大きな落石や、雪崩れが何回も通過する。緊張する。雪稜に出ると、そこは右稜であった。ルートは間違っていなかった。登攀用具を付けながら時間も時間だからスピードアップする為にザイルを2本継ぎ80メートルワンピッチで登ることにする。1ピッチ目、ここはラビネーンツークになっており、上からの雪崩れと落石が恐いが、急な雪壁をダイレクトに登る。2ピッチ目、雪壁から小さな岩を登り這い松でビレー。3ピッチ目、雪稜を登る。つるべで登っているため、160メートルを一気に登らなければならないので非常にしんどい。4ピッチ目、頂上直下の雪稜から雪壁を登る。セラック状になっており神経を使う。5ピッチ目、頂上の雪底を越すのは大変なので右から回り込み、頂上に出る。頂上は一人の登山者がいるだけで静かな頂きであった。暗くならないうちに双子尾根を駆け下る。樺平に着いてツェルトを張ろうとして、荷物の変化に気が付いた。食糧がごく一部を残してなくなっているではないか。近くには食べちらかした後が残っている。動物にやられたらしい。でも良いではないか。ビールだけは残っていたのだから。この静かな樺平にも、我々の他、動物たちも居るのである。というよりも我々が動物達のテリトリーの中に入り込んでいるのだから。寂しいつまみと食事、今日の成果に乾杯をし、いつの間にか寝てしまった。

4月29日、天気は予報の通り、雨が今にも降り出しそうでガスの為頂上は見えない。下りは小日向のコルを通らず、猿倉台地目差してダイレクトに降りる。雪の状態によっては雪崩るが、今日は心配なしと判断する。スリップしないよう下ると猿倉まであっという間に着いてしまった。

車にはすぐ下山されたしの張り紙がされており、やっぱりかと思うが、完登の気分の為、あまり気にならなかった。それとも、“赤信号皆んなで渡れば恐くない”の心境か、よくないことだ。反省、反省。二俣まで行くと案の定、当局の者が車止めの所に立っている。お目玉を覚悟して行くと、そんなに怒っている様子もなくすぐ鎖を開けてくれた。白馬で温泉につかり、明日、第二隊と合流する高田と別れ一人帰路につく。

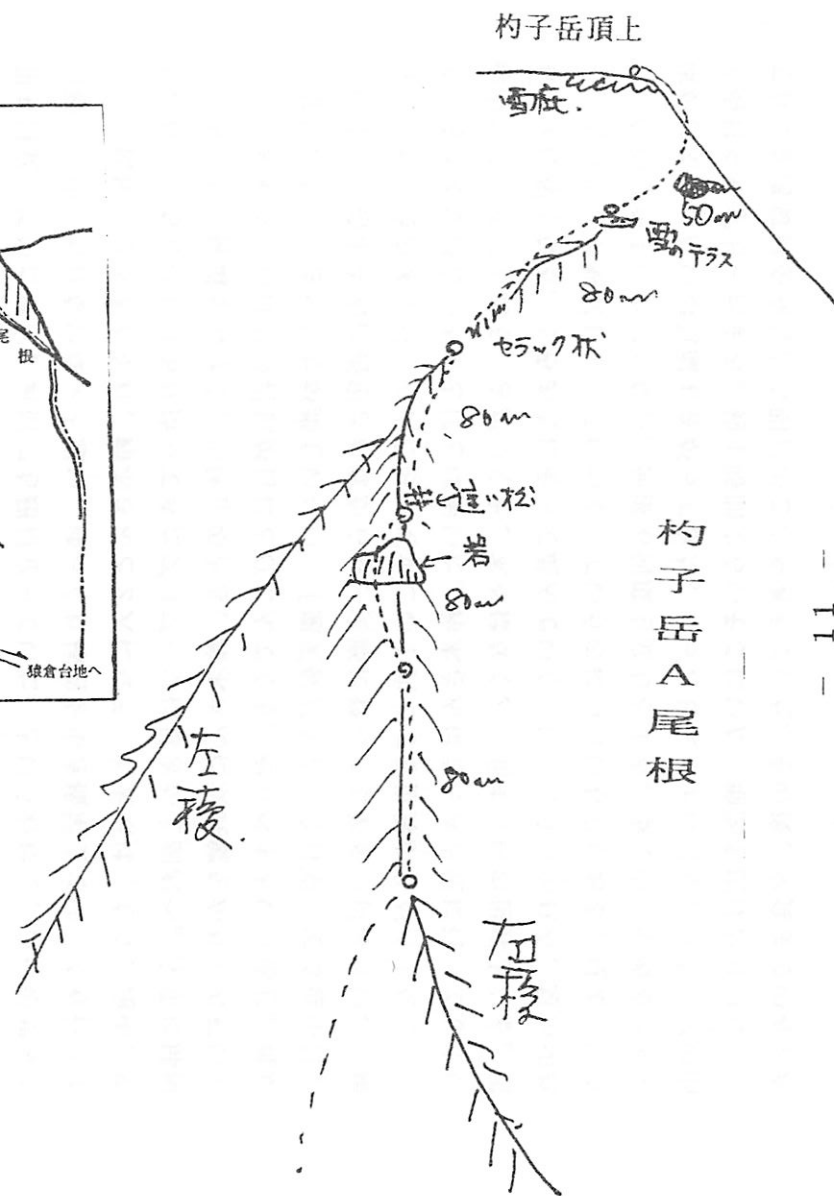
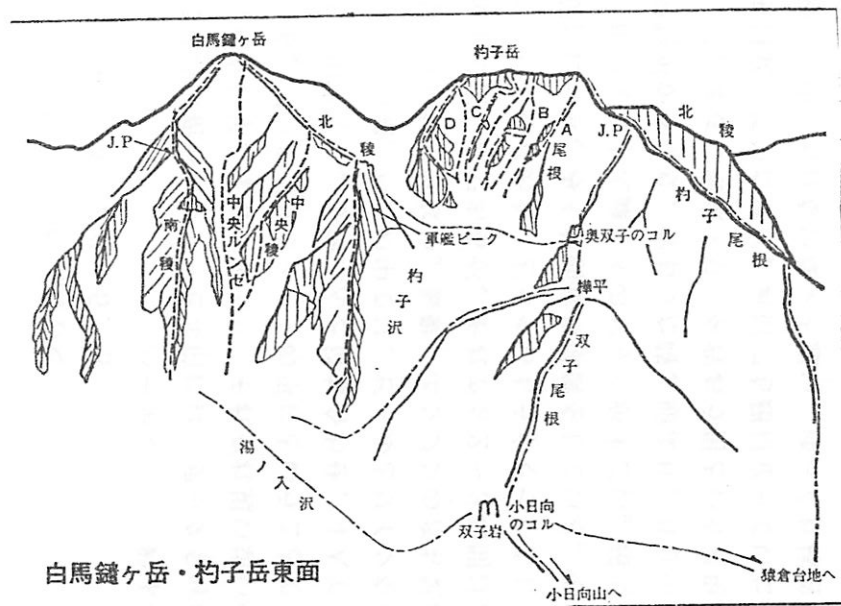
猿倉 6:30 小日向コル 8:30~8:50 樺平 10:00~10:30

奥双子コル 11:00 頂上 17:00~17:20 樺平 18:20

(本図 記)



杓子岳東壁A尾根登攀中



北アルプス 涸沢

91. 4. 30~5. 3

パーティ L. 鈴木操、笹沢ひろみ

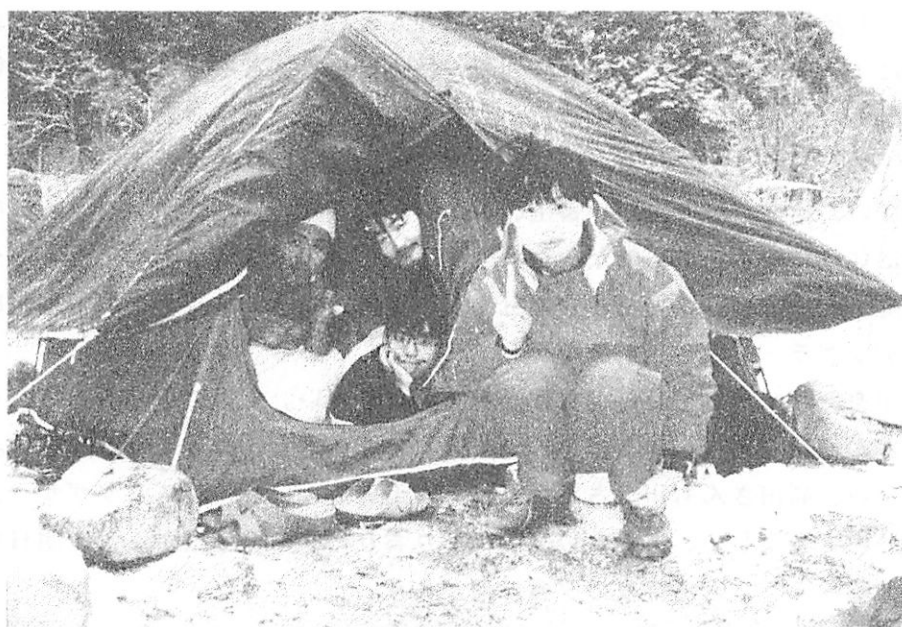
22時の新宿センタービル前には、ザックを背にした人々。テニスラケットを持った女の子、family, それぞれ思い思いの格好、目的でえがおがあふれている。ゴールデンウィークの平日ということで、思ったより人はいない。鈴木さん、川上くん、佐藤くんと待ち合わせ、4人で「さわやか信州」に乗り、上高地へいざ出発。バスの中では、ビールとワインをむりやりのみ、ねむろうとするがなかなかねむれない。振動、エンジンの音も気になるけど、最大の問題は同一体位での苦しさであるが、それでも2~3時間はねた。空も明るくなり人の声もザワザワしはじめた、どうやらもうすぐつくらしい。バスをおりると、登山者だけが目につき、みんな朝食の準備をしている。そこでわたしたちも朝食をとり出発。川上くんと佐藤くんのザックがすごい。超大きいザックの上に、何もかも荷物がかさなり、背おった時、頭より、60~70cmぐらい荷物がとび出していて、まさに東京タワーを背おう男という表現がぴったり。これは横尾までの間も目立っていたけど、新宿でも超目立っていた。というわけで、自分のザックの軽さに申しわけないなァと思い、ゆっくり林道を歩き横尾までゆっくり行きました。横尾で2人とわかれ、鈴木さんと2人になる。お天気はくもり、途中、雪をふむこともしばしばあり持ってきたプラブーツにはきかえ涸沢へ。左手に屏風岩をみながら林道をぬける。小休止のとき、鈴木さんに双眼鏡をかりてのぞいてみる。おそろしいほどの岩肌が目にとびこんでくる。ゼッペキという感じ。誰かいないかなァ、さがしたが誰もいない。「悪天候だから、今日やってる連中はいないよ」と鈴木さんに否定されながらも、実際に登ってる姿を一目みたい、と願っていた。会のメンバーの人たちってすごい！住んでる世界がちがう！なんていろいろ考えながら一人でとぼとぼ歩いた。鈴木さんはさっさと先に行ってしまう途中で待っててくれる。きがつくと、木々はなく、一面まっ白の世界となる。雪も徐々に深くなる。ふみあとにそって進んでいく。けっこうつかれる、息が切れる。もう少しで涸沢ヒュッテにつくっていいものにつらいものがある。見えているのになかなか手にとどかない。何度も何度も立ちどまる、歩くのをやめるとすぐ体がひえる。だいたい気温もさがってきた。やっとヒュッテに着く。ストーブの前で雨具をぬぎあったまる。約1時間ぐらいそこにいた。地図を広げたりコピーしてきた参考資料をみながら明日のことを考えていた。その後、夕食までのみじか

い時間だったが外で雪上訓練をうける。雪の斜面で滑ったときにピッケルでとめるといふもので鈴木さんがOKをくれるまで何度も練習した。その日はくたくたで8時ごろねてしまった。夜中トイレにおきると、外は吹雪き、トイレに行くのにも、雨具をひっかけて行く。すき間から雪が入ってきて、長い間なんてとてもじゃないけど坐ってられない。夕食後にみんなが予測してたように明日はやっぱりダメなんだと実感した。それから再び入眠、朝、鈴木さんに起こされる。

「この天気じゃむりだ、危険なことはしたくない、山はにげない、又これるよ…」と言うことばに悲しかったけど下山を決定する。外はゆうべと同じ吹雪、きのうはカラフルにみえたテントが雪にうまっていて視界もわるい。アイゼンをつけ、頭まですっぽり雨具のフードをかぶり出発。

下りはかかるとに力を入れて、おもしろいように進んでいく。途中横尾では会のテントをさがす。高田さん、川上くん、佐藤くんに会いそれぞれの報告をし、のんびり上高地へ。鈴木さんおとくいの☁️につかりながら「ぜったいまたくるもんね」と思っていた。とっても残念な山行でした。

(笹沢 記)



横尾BCにて

酒沢 B. C. より奥穂高岳へ

ザイデングラードより

91. 5. 4

パーティ L. 高田暢年、川上浩史、佐藤文則

5月4日起床。まだ眠い。下界では他人より短い睡眠時間で他人より元気でいられるのに、山では何故こんなに眠いのだろう。ああ又朝が来てしまった。外は？ ジーッとチャックを開けテントから顔を出す、見えている、奥穂がよく見えている。快晴、元気が出る、現金なものだ、今日は一般道だから楽勝だ、さらに元気がでる、今までで2番目の高度に今日は立てるのだ。手早く朝食を済ます、次は朝のお勤めだ、長蛇の列。小屋のトイレの前は大変だ、なかなか進まない、あきらめてテントに戻る、高田さんも出かけた後だ、しかたない待とう、列の最後尾に付く、2～3人前に高田さんがいる、そうこうしているうちにテント用のトイレがあると小屋の人が知らせる、そっちに行く、ものの10分もたたないうちにすむ、ああ今までの時間は何だったのだろう。さあ出発だ。

高田さんと川上さんは雨具なし、心配性で寒がりの佐藤は雨具をつけ、出発。30分も歩くか歩かないうちに汗だく、3人ともTシャツのみになる。下はジャージにスパッツだ。軽快軽快。行列の一員となり、又ある時はぐいぐい追い越して、なんだかんだで穂高岳山荘だ、ここで無線の時間調整の為大休止、川上さんジュースごちそう様でした。10時すぎに出発、やはり渋滞していてスムーズに登れない、結構足場も悪い、畜生、こんなところで死にたくないぞ、それなりに必死になって登る、ああ怖かった。やっと少し平らになった。頂上はすぐそこだ、11時15分てっぺんである。ゆっくり休んで無線。12時すぎに下り始める、ザイデングラードはしり制動のゲレンデと化している。女の人達がキャーキャーと歓声をあげて滑っている、なにかしら照れくさい。歩いて下りる、が、しかし高田さん達との差は広がるばかり、失敗してもともと、滑ってみる。早い。とにかく早い、高田さんも川上さんもどんどん追い抜く。ザー、ズザザザザー、少し冷たい、でも楽しい、あつという間に滑りおりた、あー面白かった、明日は北穂東稜だ頑張ろう、さあ今夜の夕食は何だろう。

例年がないG. W. 中の降雪のため新人である私佐藤のいるACC-Jパーティーは当初予定の北尾根をあきらめ、3190mの奥穂に立つことを主目的として5月4日の行動を行った、前日までの雪や風は全くなく、穏やかな天気の下我

々は楽しい山行の一日を過ごしたのであった。高田さん、川上さん、力のない新人に付き合っていただき有難うございました。

(佐藤 記)

北穂高岳東稜

91. 5. 5

パーティ L. 高田暢年、佐藤文則、川上浩史

春合宿前半は連日の悪天候で、屏風岩を諦め、せめて前穂高岳北尾根にとも思われたがラッセルがひどく断念。それなら北穂の東稜に登ろうという事になった(?)。

前日、小屋のトイレが早朝には混んでおり、一步誤ると40分も時間を無駄にしようという事実が発覚したが、この日は時間差攻撃によりスムーズに用を足すことができた。

日の出前、空がまだ薄暗い中、装備をまとめて涸沢を出発する。春山の冷気を胸一杯に吸い込み、とてもすがすがしい歩き出しだと思いつかの間、北穂沢に入るとそれはもう歩みにくいと思ったらありゃしない。雪が腐っている間に人が通ってボコボコになった所が、そのまま冷えて固まっており、おまけに道は案外急登で、前を行く高田さんと佐藤君に大きく差をつけられてしまった。

さて、適当な所で休息をとり、雪の斜面をトラバースしていよいよ東稜の取り付きである。ブッシュをつかんで登り、ちょっとした岩場を乗っ越して東稜上に出た。割合に広い尾根で、ザックを降ろして登攀具とヘルメットを着装。しばらくは安全な雪稜なので、ザイルはザックの中。

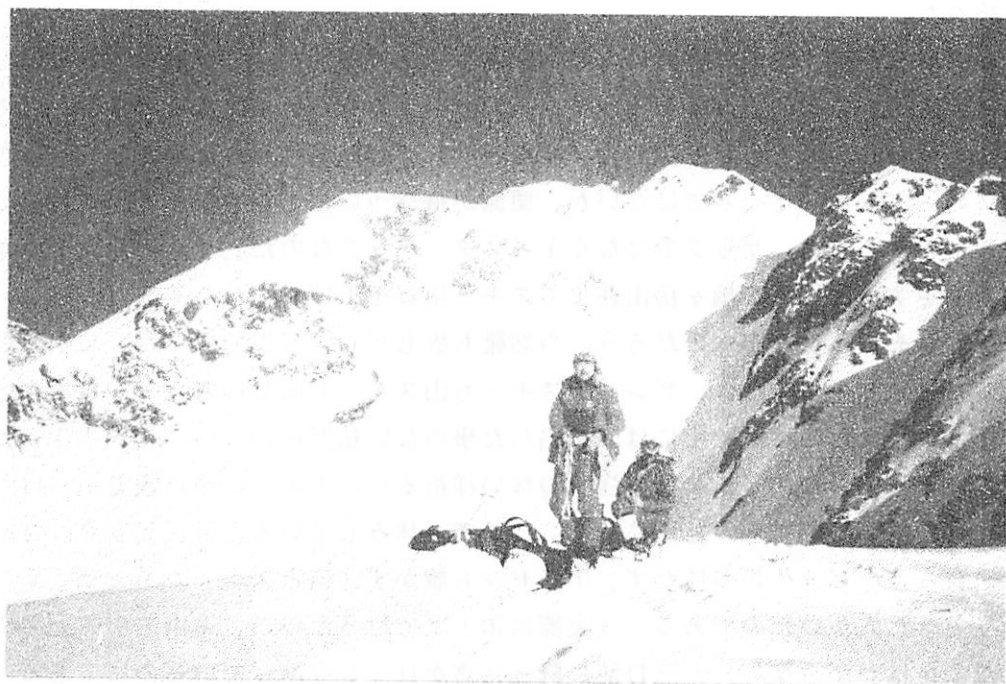
展望は大変すばらしく、北穂沢を登る登山者が蟻の行列の様に見える。涸沢から前穂高岳北尾根、また奥穂が格好良く眺められる。紺碧の空に映える、朝日に照らされた穂高連峰を見上げながら、最高の気分で雪稜を登る。

我々はこの日の東稜の三番目のパーティーであった様だ。前には2人組と単独行がいた。雪稜がだんだんやせてきて、いよいよ核心部のゴジラの背である。ここでザイルを出す。ふと後方をふり返ると、雪稜上が渋滞し始めているのに気がついた。岩稜を越えると東稜の大コルである。実は、北尾根の5、6のコルの様な場所を想像していた私は、ただ稜が低くなっているだけの地形を見て、大いのがっかりした。ここでザイルを片づけ、後はただひたすら雪の斜面を登るだけである。これが案外楽でもなくて、体力不足を感じながらひたすら登ると、いきなり北穂の小屋に出た。頂上で休息。槍ヶ岳が大変格好良く見えている。今頃、本図さん達が登っているんだろうな。北穂の頂上から槍パーティーと無線連絡。その結果、我々は横尾へ降りて社長(本図さん)たちを迎えに行くことになった。

滝谷をちょっと眺めて北穂沢を急降下する。初めのうちは調子に乗って、落っこちる様に降りていたが、暑くなったのとくたびれたので、服を脱いでアイゼンを外していると、高田さんと佐藤君に抜かれてしまった。登ってきた東稜を見ると、雪稜上で大渋滞が発生していた。早目に取り付いてよかった。

昼頃に涸沢に戻り、撤収して横尾へ下山である。涸沢に上る時には多かった雪も、もう消えかかっており、雪山の季節の終りを感じた。さて、横尾についてテントを張って、一段落。この後、社長パーティーを迎えに行くという使命を果たすため、三人で槍沢へと入っていったのである。

(川上 記)



北穂東稜

槍ヶ岳（槍沢スキー滑降）

91. 5. 4～6

パーティ L. 本図 一統、栗原孝、村上晴美

今年の春山合宿は、小生の場合、前半は登攀だったので後半は山スキーにする。

5月4日、晴。例によって例のコースで上高地に着く。2日前に降った雪が残っており、それが凍ってツルツル滑る道を行く。スキーが重くザックが肩に食い込み苦しいが、下りの快適な滑降を想像しながら頑張る。明神の先で水戸葵山岳会の小森氏と逢う。奥穂の登りでは胸までのラッセルだったとか。すでに入山中の屏風隊はどうしたか気になる。横尾で無線交信すると、高田パーティは奥穂高を登っているとかで全員無事でほっとする。旧槍沢小屋跡の幕営地まではけっこう疲れた。

5月5日、晴。槍沢の登りは辛い。大曲りの上あたりから日が照ってきて暑くなってきた。2時間位登ったろうか、上から数人のパーティが滑ってきた。見ているとそのうちの一人が転倒した。するとザックが転がりだしたのである。こちらに向って転がってくるではないか、栗原が飛びついてこれを止める。これを見て僕は唖然とした。ザックではなくキャスターバックなのだ。そういえば今年から予約をすればヘリで槍ヶ岳山荘までスキー用具を上げてくれるそうだ。このパーティもそうした連中なのだろう。当然靴も板もゲレンデ用であった。しかし最近のスキーヤーの中には、ゲレンデスキーも山スキーも同じに考えている者が少なくない。ほかのパーティには口を出した事のない私だが、つい“えー！！これで来たの”と言ってしまった。怪我のない様祈るだけである。重い板を引っ張りながら、約5時間でやっと肩に着く。ここで一休みしていると、又ビックリさんに出会った。ピッケルも持たず、アイゼンも履かず、何とスニーカーで頂上から降りてきた人がいたのである。（実際は頂上まで行ったのか、途中で引き返してきたのかはわからない）、三日前に降った雪がけっこう凍っているのにである。恐さ知らずなのか、超ベテランなのかは、知るよしもないが呆れるやら、感心するやらであった。アイゼンをつけ、私と村上はアンザイレンし、栗原はノーザイルで頂上に向う。どこかの大学山岳部がザイルで確保しながら降りてくる。時間がかかりそうなので先に登らせてもらう。頂上で記念撮影をしていると北鎌から人が登ってきた。見ると人気ルートである北鎌尾根は大渋滞の様だ。早速下降に移ると、先程の大学パーティが、まだ同じ所で何やらごちゃごちゃやっている。ここで又、普段は無口な私であるが、つい口を出してしまった。“えー！！まー

だここにいるの！！”って。するとリーダーらしき人が“すいません”と一言。
“いーの、いーの、安全にゆっくり降りて下さい”と、すかさずフォローするところはさすが、と自賛しながら先に行かせてもらう。だって、ここで、“君達いつまでもたもたしてんだ！！早くしろ！！”などと言ったらどうだろう、彼らは自信喪失に陥り登山をやめてしまうかも知れない。数年後はチョモランマのサミッターになるかも知れない人材なのだ。私は数名の登山者を育成した満足感で一杯であった。さて、いよいよ槍沢の滑降である。歩きの栗原と村上は先に出発。しかし、滑り出してみると、今まで想像していたザラメ雪の快適な滑降とは程遠く、三日前に降った雪がくさり重くてしょうがない。急斜面はジャンプターン、緩斜面はシュテムターンで降りるが、2年前、黒部の柳又で骨折した足が痛くて我慢ができなくなってきた。楽しんで滑るというよりも、早くこの痛みから解放されたい、という一心からどうしても先を急いでしまう。この素晴らしい大斜面も傾斜が落ちてきた。すると気も緩んだのか、くされ雪に足をとられ数度転倒する。約一時間でテントに着き、すぐに靴をぬぐと、やっと一息つけることができた。栗原、村上は約40分後に到着する。テントを撤収し槍沢ロッジまで行くと、高田、川上、佐藤が迎えに来てくれていた。足も痛いので遠慮なく荷物を持ってもらう。横尾では全員の無事を祝い、大宴会？となった。

5月6日

例のごとく、例の様に上高地に下山。鹿教湯温泉で一浴し、一路茨城に向った。

(本図 記)

槍ヶ岳山頂



丹沢・弥七沢～湯の沢中俣山行記録

91. 5. 19

パーティ L. 本図一統、原田真由美

時は5月19日、ゴールデンウィークも過ぎ、平穏さを取り戻した第3日曜日、今年最初の沢登りを西丹沢で行った。メンバーは本図・高田・高木・佐藤そして私の5人。前日の夜土浦に集合。『まだ沢の水は冷たかろうに、よくもまあ集まったものだ。』と思いながらメンバーの顔をながめて苦笑してしまう。玄倉に着いたのは午前1時半をすぎたろうか。今回の山行は2パーティに分かれ、まったくの逆コースを取るという趣向。私の同行者は本図さん。予定は弥七沢左俣～湯の沢中俣、そして湯の沢右俣を再び登り返し、小割沢を下降して玄倉に戻るといふ少々長丁場の山行だ。私達は早々と予定する沢への降り口を確認して仮眠に入った。

当日、天気晴れ。5月も終りのせいか早朝の空気に寒さは感じなかった。6¹⁵ 各パーティは予定の沢へと出発。弥七沢は、沢へ入ると5mの滝となる。そこを左から越えるとゴルジュの中に6mの滝が現われ、続くナメを越えると10m・10m・4m・4mと滝が続く。ここはゴルジュの中で、しかも大きな釜を持っているためにかなり悪く、左の灌木帯に逃げてきこり道をたどり再び沢へ降りる。沢筋は明るくなり、ゴーロから7mの滝、再びゴーロから7mの滝へと続く。やがて左岸より大槲を持ったルンゼ状の枝沢が出合う。本流は左へ曲がり5m・10m・6m（曲り滝）と滝が現われる。続いてナメから10m・4mの滝を越えると二俣となる。っと文献には書いてあったが、良くおぼえていない。ただどの滝も問題なく、ほとんどザイルも出さずに越えてしまった。遡行中私達は、くだらない世間話をし、時には本図さんから、本流の見分け方・滝の高巻き方法を教わりながら、実に愉快的な山行を続けた。しかし、それが良くなかったのだろうか。話に熱中するあまり…、というよりは、稜線までコースタイム4時間の所を2時間で達してしまうというスピードで登っていた為に左俣の入り口を見逃した。そして気がついた時には、大嫌いなヤブの中には入っていた。

ヤブに入るといつもの事だが、同行の本図さんは野生の血が目ざめたように歩くスピードが増す。私がひしに後を追いかけても、あれよあれよという間に姿が見えなくなってしまうので、何回となく叫ぶはめになった。どこをどのように歩いたのか、その後延々と1時間もやぶごぎを続け、結局弥七沢の頭に出てしまった。しかたがないので、そのまま長い稜線をたどり、なんとか湯の沢中俣への

下降路を見つけて下り始めたが、今度はいくらも下降しないうちにもう一方のパーティと合流してしまった。どちらかのパーティがルートを間違えている事は明らかだ。しかし、人と出合わない山の中で人に逢うのは喜ばしいもので、まして知ってる顔ならなおさらだ。私はただただ喜んでいたように思う。しかし私以外の4人は、その後も正規のルートをさがすようにルート図をにらんでいたようだ。結局そのまま下降を続け、登り返す気力も失せてしまい、中川温泉におりてしまった。

(原田 記)

小割沢

91. 5. 19

パーティ L. 高田暢年、高木均、佐藤文則

今日の遡行はちょっと面白い、その計画は、先ずは小割沢を登り湯ノ沢乗越から湯の沢右俣に入り、それを下り、次に湯ノ沢中俣を登り弥七沢を下るというものである。さらにこの計画を面白くしているのは、これが単独パーティーのみでの山行ではなく、逆コースでもう一パーティーが遡行し、途中ですれ違うということである。

さて本図、原田パーティーとはどこで逢えるだろうか、それを楽しみに高田・高木・佐藤は車を後に小割沢に入った。

遡行図には直登不能と出ている滝のほとんどが高田さんのトップで直登可能となった。

定時連絡の時本図・原田パーティーが迷ったみたいだということを知られる。沢の大魔人様が一体どうしたしたことだろう。とにかく上へ。

高田さんが落ちた、沢のメインの部分も過ぎ、もうすぐ稜線というところで突然高田さんが落ちた。落ちたというよりも足をのせていた部分が崩れた感じだった。ゆっくりと目の前を高田さんが滑り始める。すぐに止まると思ったが、一瞬にして加速し、高田さんの顔が目の前を通りすぎていった。手が出なかった。

「わー」としか声が出なかった。

止まった、5～6m下の昔の釜だったような所で高田さんは止まった。高木さんと佐藤で上に出て、ザイルを落とすことにした、慎重に、より土手側を登る。高木さんが飛んだ。安定している所まで約1m、足場がしっかりしていればなんでもない距離だ。しかし、今はザレていて、しかも斜面だ。もう一歩前に出たい。躊躇した、ら、落ちた。

佐藤も落ちた。今度はフリクションが効かなくなって落ちた感じだ。（飛ばうとして、飛ばなかったのだから当然か）高田さんと全く同じように同じ所を落ちる。最初はゆっくり、だんだん早く、そして釜の落ち葉に軟着陸。あーよかった。助かった。上からザイルを下ろしてもらい、せまく水のなくなった滝を登る。

稜線まではすぐだった。ただ遡行図とは幾分様子が違うようである。迷ったか。

遡行図では主稜線に直接出るようだが、どうやら支稜線上又は尾根上に出たようでだ。

交信する。向こうも迷っているらしい。おまけに本図さんは目をヤブについて

しまったらしい。

とにかく道を探さなくては、踏み跡はしっかりとついている。主稜線と思われる方へ高田さんと高木さんが偵察に出る。実は地理がよくわかっていない佐藤はその場に残る。

ほぼ一時間して帰ってくる。どうやら向こうが主稜線らしい。無線で本図パーティーも同じ稜線上にすることがわかる。移動。

主稜線を逆方向に五分も歩いた所で大声をあげると、本図さんからの返事がくる。直ぐそこに居るらしい。見えるかな。

残念ながら声だけだった。ちょっと遠いので戻り乗越を越え中川のほうへ下る。我々と本図パーティーと、どちらが間違っただかが話題になっている。我々が正しいはずだ。

急な沢をおり、しばらくいくと、上から本図さん原田さんが現れた。合流、やはり真近にいたのだった。

どちらが正しかったかますます熱く論じられながら下っていく。どうやら我々が正しかったようだ。

玄倉までバスで戻り、車を取りに高田さんが行く。途中で乗せてもらったカッ飛びジムニーに遠くまで乗ってしまったらしく一時間してやっと帰ってきた。

波乱の一日はこうして終わったのであった。

(佐藤 記)

表妙義縦走

91. 5. 28

パーティ L. 鈴木操、笹沢ひろみ

早朝に急勾配の石段は辛い。規則的に靴を上げる動作が暫く続く、周囲は杉の大木が神社特有の趣である。やや遅れ気味のSさんとは二度目の入山で少し緊張気味なのか口数が少ない。人影の無い妙義神社の手洗所で一休みの後うす暗い山道に入る。”ルルッ…” ”鈴木さんですか?” ”ハイ” ”アノーSさんを谷川岳東尾根に入る前に岩トレしてくれませんか?” ”ハイどんな事を?” ”まかせますのでヨロシク” ”ハイ判りました。”今日の入山は岩トレの積もりである。だが岩場でガチャ物を使うザイルワークをする予定は組んで無い。なにしろ任されているのでアル。ビギナーのSさんに岩稜と高度感そして脚力を鍛えてもらうのが目的でザイルは持参していない。空は高曇りで今日一日は持ってくれるだろう。コースは妙義神社から白雲山を経て相馬岳そして中ノ岳神社へ下る表妙義縦走である。一応ベテランのみ許されるコースでガイドブックと現地の立札がソレを証明している。大の字までは赤土混ざりの登りで所々クサリが固定されている岩場が有る。余り人氣が無いのかサビで両手が汚れる。Sさんに”クサリはバランスを取るのに利用し足で登るように”ハイッ。後先にガードしながらハッパをカケルのだがドーモ心もとない。つついクサリに頼ってしまう。話し声が聞えて岩影から女性二人の顔が見える。オバサン達もガンバッテいるのだが装備を見るとハイキングそのものである。スニーカーではヌレた岩場で難儀する彼女達に曰く、この辺で降りた方がいいですよ、”ベテランのみ入山と立札が有ったでしょ”。二名の熟女に我々は胸を張る。遠くに彼女達の声が消える処に大の字が有った。大岩の基礎にアングルで補強した鉄板で大の字が溶接されている。登山口から見える事の出来る唯一の目標物で白ペンキが塗って有る。周囲がスパッと切れ落ちる狭い山頂にSさん平気でアル。以外で有る。ここから登り降りが続く岩稜はピンク色の山ツツジと鳥の声に気が休まる。時折クモノ巣が顔に張り付きフェミニストの私が前を歩かされる。クサリの利用も上手に成りペースが上がるSさんに”ヨシッ三重丸”と褒めてやる。女性はオダテに弱い、怒るより効果的なのは長年の経験である。だが花丸の五重丸はマダ先の事であろう。しかしこのヤセ尾根に何本も踏後が有るのがマギラワシイ。何度かコースを外れ枝にテープや布切れが目印に尾根に出るのだが山菜や盆栽を取りに来た輩(ヤカ)達の物であろう。これで時間をロスする。今少し道標の数とコースの手入れをしてもらいたいと二人

は休む度にグチる。何とも不親切で腹が立つ。見晴しの良いテラス状の所で昼食を取りながら次回の東尾根の話等をする。岩場の片隅に缶ジュースと夏ミカンが置いて有る。マダ新鮮である。遭難者への供物に私の手が延び“頂きまあす”二人で合掌。フルーツの持合せの無い我々には貴重なビタミンCでウマカッタ。荷作りの後、コースも後わずかで有ろう東岳で迷ってしまった。コース上で一番立派な標識の近くでコレで有る。左は石門へ右は妙義湖へ、直進するが溜沢に出て下る一方の山道は明瞭で靴跡まで見られる。目印のテープ等が見られず迷ったな？と思い周囲を観察する。沢の源頭の様子でザレた所から水がチョロチョロ湧出している。私はユーウツで有る。登り返す体力、時間の事を考えるとがイラ立って来るのが判る。しかし顔には出せない。Sちゃん、このまま下ると湖泳ぎで林道歩く事に成るから一休みして戻ろっ。エ〜〜ツ。元へ戻る動作はスリッパも多く成る。今日は何度か有り”町に抗議してやる”Sさんのズボンは泥だらけである。こんなにおりたかなと思い元の標識まで相当のアルバイトにウンザリすると共に私は自信を無くしてしまいがちになる。やはり夏みかんを食ったのが悪かったのかな…。下山後に土産店の話では一ヶ月前に大学生がアノ場所でスリッパして死亡したのもコースが不明瞭なために体力が持たなかったのでは…。納得！我々ですら自称ベテランの片ワレがこれである。ヨシッ。中断してハイコース石門めぐりでルンルンしようネッ。天気がくずれないのが幸運であった。彼女は尻モチをついた格こうで力なく頷く。ゴール間近となると足は早い、下からハイカーの声が聞えステンレスのクサリや鉄製のハシゴ、立派な標識でハイコースは金をかけて有る。カメラと菓子類の出番が多く成り塾練者がハイカーに変身する。すでにロープやカラビナはザックの中である。ゴールの中ノ岳神社で無事を祈って缶ビールを飲み乍らタクシーを待つ。出発点までリッチに泥だらけのズボンで帰還する姿は花丸の五重丸でアル。終日風も無く高曇りの静かな山行であった。

(鈴木 記)

谷川岳東尾根

91. 6. 2

パーティ L. 本図一統、高木均、村上春美、笹沢ひろみ

念願の「東尾根」に行くことができました。早朝、マチガ沢出合を出発、厳剛新道を登りはじめます。新緑の6月という感じの林道を入っていくと突如視界は白くひらけ、マチガ沢の雪渓を登りはじめました。つま先で雪をけりながら1歩1歩のぼって行きます。前回の妙義山で両足の親指にパープルのマニキュアをぬっている私にとってけっこう厳しいものがありました。とにかく先に行く本図さんの足跡をたどり進んでいきました。雪渓ではスピードスキーのポールがいっぱい立っていてテントもはってありました。雪渓のはじの方には、何十人ものスキー板が無ぞうさ立てかけられていて人がいそうな雰囲気なのに私たち4人だけです。汗ばんだ体に雪渓のひんやりした空気がこちよく、あたりはシーンと静まりかえり、鳥のさえずりだけが心にひびきます。

いよいよ雪渓の斜面は急になりザイルを出してもらい、何ピッチも登っていきました。ツルツルすべって登りにくく、ザイルや、くま笹に強引にしがみつき、途中、ほんとに頂上をふめるのか不安になりました。

雪渓をやっとクリアーしたと思ったら次はやぶこき！そして次に現れたのは岩のぼりでした。本図さんは「岩のハイキングだと思ってね」なんて言っていたが、緊張していました。岩を少し登り出すとさっきの不安もすこしづつ軽減し、名前こそ知りませんが岩場にかれんに咲いている高山植物・ガスが一しゅんスーッと消え、足元に広がるマチガ沢の雪渓に感動しました。

途中危険な所もあったけど、ザイルをたよりに、本図さん・高木さんという超ベテランの2人におしえられたとうり登っていきました。ゲレンデではちがいがい応用がいっぱい、落石のことや、確保する時の位置など、本番の岩のぼりは再認識の点が多数ありました。とにかく、しっかりしたホールド、スタンスを見つけて確実にのぼっていきました。それと、もう1つ考えたことは、岩登りをする上で、もう少しやせていたら、スムーズにのぼれるのではないかということです。谷川岳から帰ったあと、ダイエットしようと心にちかった私ですが、ごらんのとおりです。この問題は今後も課題となります。

そんなことを考えながら徐々に高度をあげ途中たのしくビデオ撮影なども行いました。ガスがパーっとはれ、悪魔のすむ一の倉も見えました。くも男が岩をスルスル登っている姿も見えました。将来は私も手足にたこの吸ばんでもつけて一

の倉を登ってみたいと思っていましたが、とてもとても、そんなこと恥ずかしくていえませんでした。

いよいよ谷川岳のオキ&トマの耳をきわめ肩の小屋で昼食をとって下山、西黒尾根から見る東尾根は超かっこよく、あんな所登ってきたんだ、とみんなに自慢したいくらいでした。1人で登りおえた充実感にひたり、下りながら、口元が自然にゆるみそうになるのをおさえ、「よくやった!」と心の中でつぶやいていました。昼ごろより雨も降り出しツルツルすべって、高木さんにはみっともない姿を何十回も見せてしまいました。夕方無事下山終了し雪渓でつくった氷あずき、今日の山行に満足していました。ほんの少しだけ、ACC-Jの会のメンバーに近づけたような気がしてとてもうれしかったです。本図さん・高木さんに感謝したいと思います。

コースタイム (あとはよく覚えてません)

マチガ沢出合 5:40 出発←→到着 16:30

(笹沢 記)

谷川岳東尾根登攀記

91. 6. 2

パーティ L. 本図一統、村上春美、笹沢ひろみ、高木均

曇空の下、マチガ沢出合の駐車場を出て厳剛新道に入る。村上さん、笹沢さんともに谷川岳は初見参ということで、本図さんの暖かい配慮のもと、谷川岳の展望台である東尾根へと向かう。高木は一の倉沢南稜の予定がパートナーの都合で行けなくなり、このパーティに同行させてもらうことになった。

厳剛新道が尾根に別れていくところでマチガ沢に入る。すぐに雪溪の上を歩くことになる。どこかのスキー部の合宿か、テントが一張りとポールがたくさん立っているが、誰もいない。進むにつれて雪溪の傾斜が強くなり、本図さんはビデオで撮影しながらどんどん行くが、村上、笹沢両名は雪溪歩きに慣れないためとハイキング靴や運動靴のため、ズルズル滑りながら苦労している。谷川岳や対岸の山の頂上は雲に隠れ、今日一日好天は望めそうにない。

ほどなくシンセン沢が右より出会う。かなり小さい沢である。傾斜が急なので、登山靴の高木を除いてアンザイレンする。雪溪の縁を笹を頼りに5、6ピッチ登るとシンセン沢左俣との出合で、雪溪の終了点である。右俣は沢というより単なるくぼみである。ブッシュをかき分け、2ピッチ登ると略奪点にでる。右側の沢の源頭の岩場を2ピッチでシンセンのコルである。ここまでで、既に出発から3時間半が経過し、登山経験の少ない笹沢さんはやや疲労気味で、「もう頂上は近いのですか?」。後続パーティが下にみえる。

軽く食事をとり、いよいよ東尾根の登攀にかかる。登攀といっても尾根歩きが続き、高木を除いた3名はときどきスタカットをまじえながらコンティニアスで登る。10m程度の第二岩峰は正面左の凹角がルートであるが、マチガ沢へ一気に落ちているので、高木もアンザイレンして慎重に登る。さらにどんどん尾根を登っていくと、観倉台にでる。

ここで大休止をとって昼食とする。ガスにつつまれ山の撮影ができないので、女性2名のインタビュー撮影をおこなっていると、突然一ノ倉沢のガスが晴れた。南稜に登っているパーティがよく見える。よくもあんな恐ろしい所に登るものだと、人間の行為の不思議を感じる。小雨がパラパラきたので、ヤッケを着込む。

第一岩峰は右をまくこともできるが、直登する。短いが、ややかぶり気味で強引な登りをさせられた。観倉台から小一時間でオキの耳の直下に到る。容易に見えたので高木は直登したが、予想より難しかった。右からまわりこむと簡単に頂

上である。

記念写真を撮り、登攀用具をしまっているとついに雨となった。あわてて、肩の冬季小屋に潜り込む。本図さんに味噌汁をご馳走になりながら、腹ごしらえをする。雨足は弱くならないので、雨具を着込んで観念して下山を開始する。

雨の西黒尾根はよく滑る。途中で笹沢さんが石につまずいて転倒し、西黒沢側に4mほど転落するが、幸い事なきをえた。ガスの中から、東尾根がまさに恐竜の背のように頂上に突き上げているのがよく見えた。数時間前にあそこを登っていたかと思うと、まさに夢のようである。「遙けくも来たものかは」という感慨を新たにしながら、厳剛新道を下った。笹沢さんは疲労の為か、最後までよく転んでいたが、村上さんは年の功か最後まで元気いっぱいであった。マチガ沢出合では雨にも負けず、本図さん特製の氷あずきを頬張って山行を締めくくった。

マチガ沢出合(5:40)ーシンセン沢出合(7:00)ーシンセンの科尔
(9:00)ー観倉台(11:30~12:00)ートマの耳(13:00)
ー肩の小屋(13:30~13:50)ーマチガ沢出合(16:30)

(高木 記)

岳連救助訓練

91. 6. 9

参加メンバー 鯉河仁志、高田暢年、川上浩史

まだ前夜の酒のにおいが残る体にムチ打って集会場所の土浦に向う。今回のメンバーは川上、高田、鯉河の三名である。訓練の集合場所の本山トンネル西口広場に着くとすでに他会の参加者や岳連の役員の方など先に来ておりすぐに出発準備をする。役員の挨拶、参加者の紹介の後、班編成を行い当会の三名は、救助隊副隊長の河又氏の指導のもと訓練を行う。

訓練は、始めに一人で負傷者を背負う方法。次、二本の木を切りビニールシートを利用してタンカを作り搬送訓練を行ないながら御岩山を目指す。最後の登りは、固定ザイルを利用して負傷者を背負って登る訓練で私の背負ったのが体重の重い川上君のためこの日一番の重労働となる。

御岩山到着後、半マスト結びを利用した片手懸垂、岩場の途中で作業する為のザイルの固定方法など、講師の指導を受けながら何度も練習する。午後は、負傷者を背負って岩場を下るアルパインレスキューを行う。負傷者を背負っての懸垂は、ハーネスが腰だけなので体が大変苦しかった。次回は、フルハーネスを使用してみたい。

川上、高田も背負っての懸垂、サポートの片手懸垂など精力的に訓練し一通りの技術を身に付けて終わる事が出来た。

(鯉河 記)

コップ左岩壁の思い出

91. 6. 16

パーティ L. 本図一統、原田真由美

谷川岳コップ左岩壁J M C Cルート、3ピッチ目ハング下で敗退…

私がA C C - J 茨城に入って初めて出されるであろう文集の中に、何んでわざわざ自分の敗退記録を出さなきゃならんのかと、一人ブツブツ考えながら重い筆を取った。(こうなりゃ惨めな敗退を、勇敢な敗退に書きまおう。)と考え色々思い出してみたが、やっぱりただの敗退でしかなかった。しかし惨めは惨めなりのドラマがあったので、ここに記録として残すことにする。

3ピッチ目も2/3程登った頃、ピピッという時計のアラーム音が聞こえた。(もう11時なんだ…。)登り始めて30分過ぎていた。頭の上からは時々、「どうしたんだ。」「何やってんだ。」と怒鳴る声が聞こえる。私も『何やってんだ。…って登ってんだよ。』と怒鳴り返したかったが、そんな余裕はなかった。アブミの最上段に乗り、不安定な格好で身体を伸ばしたって、次のボルトに手が届きやしない。ハングはすぐ上にあるのに、自分ながらイライラしてくる。時間が経てば経つほど、腕も足もパンパンに張ってきて、(ウワッ…筋肉破けちゃう。)なんて思いながらフィフィにぶら下がる。そして又再挑戦。アブミ最上段よりさらに高い位置にシュリングをセットして、足先を入れたら思い切り伸び上がる。(ふう…やっと前進できた。こりゃ上で相当いらついているんだろうな。)などと考えながら、何とかハング下にたどり着いた。しかしその後が決定的な悲劇が起きた。私の身体は完全に岩から離れ、かろうじてフィフィがアブミの2段目プレートに引っ掛かっていた。垂壁から張り出した岩は大きく、手を伸ばそうが、足を伸ばそうが、ついさっきまでへばり付いていた垂壁には届かなかった。必死に身体を持ち上げようと努力するが、腕力だけで持ち上がるほど身体は軽くないし、まして鍛えぬかれた腕でもない。そのまま降ろしてもらうにも、プレートにがっちり食い込んだフィフィは外れはしないし、又ナイフで切り取る勇気もなかった。ただ時間が過ぎる。そのうち、ぶら下がっているボルトが心配になってきた。(もうだめだ。私の人生ここで終わるかも知れない。)っと本気で考えた。

しかし、「憎まれっ子世にはばかる」とはよく言ったもので、現在私は生きている。そして、又挑戦したいと思っている。あの時上で、ずっと確保し続けてくれた本図さん。ありがとう。そして又よろしく。以上

(原田 記)

山菜採り教室山行

91. 6. 29~30

参加メンバー 本図一統、菊地光夫

6月28日の夜茨城を出て一路新潟は小出インターチェンジに向う。

AM1:00集合であったが、深瀬氏とそのお客さんは、まだ来て居なかった。

1時間後に到着して合流となる。メンバーは茨城より本図氏と2名。

深瀬山菜取り教室のお客さん12名と深瀬氏のアシスタント（梁山泊）が5名だった。

これより奥只見へと向う。雨池橋の所にACC-Jの赤布をつけて上部へと向う。赤布は後、谷川岳パーティ高田、原田組の為の目印である。現着4時、そこで直ちに深瀬学校18番の名物の宴会が始まる。私も深瀬教室は2度目なので、ある程度はわかっていたので、セーブしながら飲んだが朝より飲みすぎてしまう。3時間程飲めや唄えやの宴会をして9時に山菜採り出発となる。

4WDの1トントラックの荷台に総勢15名位乗り込み、残りのアシスタントパーサーは、豚の1頭（60Kg）の丸焼の準備に取りかかる。

私達は、車で約30分位の山域へと向う。

歩き始めると直ぐの所にヘビの巣があり、みわたすかぎりヘビ、ヘビ、ヘビであった。

とぐろを巻いたヘビ又は、かたまって交尾中のヘビもいた。この時は、俺もヘビになりたい。少し進み、沢へ下りそれより沢スジを歩きながら山菜の勉強である。ミズ、ヨブズマ草、ウバユリ、ハハコ草、タラの芽、ゼンマイそれにウドと山菜の宝庫であった。途中で昼食をとり、3時頃にベースキャンプにもどる。ベースに着くと豚が色よく焼けて、いい香りがしていた。よく見るとワインを豚に振りかけながら焼いていた為であった。

採って来た山菜を、天ぷら、おひたし、酢物、イワナのさし身とそれが全てで、んこ盛にならぶ深瀬教室夜の宴会の始まりで、又、酒、酒、酒……と続く、

そして歌……

翌朝は、どしゃぶりの雨音で目がさめる。だが又、朝より宴会が始まり飲むはずだが雨が強く、途中いくつかの沢を横切る為に増水の危険があるので出発の準備をいそぐ。一路栃尾又温泉へと向う。きれいになった後は小出駅前の名物へぎそばを腹いっぱい食べて解散となった。

（菊池 記）

山菜教室



山菜教室 ブタの丸焼き



※編集後記

今年の春合宿は天気に恵まれなかった。屏風岩パーティも結局一本も登れなかった。小生が初めて屏風岩を登ったのは今から25年前の春である。その時は中央カンテと東稜を登った。ニッカーや石井のクレッターを履いていたっけ。あの頃は楽しかった。山には若人がたくさんいた。かわいい女の子もたくさんいた。(今はぢいさん、ばあさんばかり)、しかし小生は女の子には目もくれず登攀に勤んだ。(エッ、うそだって、いや、本当の話です。) 屏風岩も混んでいたので取付きまでヘッドランプで行った。あの頃の仲間は今もう山から去ってしまった。あー、あの頃は良かったな。と、しょっちゅう昔の事を思い出すようになっては、小生の登山人生も終りに近づいたかな。がんばらなくっちゃあ～～

土度助兵衛



季報「岩と溪谷」創刊号 発行1991年 春

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城 茨城県新治郡八郷町柿岡 1997 本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
